The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	報告Ⅱ
Author(s)	浅野, 亮
Citation	OUFCブックレット. 2014, 5, p. 95-96
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50116
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ハンドアウト

浅野　亮

１．教科書として

１）枠組みと論理

政治学（現代中国政治，国際関係論）＋近現代中国史

⑴事項別＋時系列

⑵特記すべき岡部達味と川井悟の役割

⑶分析の前提となる論理の明示と解説

（坂野正高は比較政治学の枠組みを導入したが，明示しなかった）

２）近現代史の解釈の変化とその背景や理由

⑴清末から 21 世紀初頭まで貫徹する説明が要求される（！）と想定

⑵変動の規模とメカニズム：政治，社会，経済，法律，軍事，文化，学術など。相互作用とそのメカニズムの説明があってこそ意味づけ可能

⑶中国の特殊性の前提として，比較が可能という立場

３）教科書としての考慮

⑴新旧の枠組み：時期は伝統的区分（大躍進，文革，改革開放など）

⑵構成：当初は研究史を各章の冒頭に

→記述が歴史に規定されている意識→本書は最終解答ではない！

⑶課題の「重要性」≧実行可能性（「テーマが大きすぎる」）

２．分析枠組みと史資料

１）明示的に使わなかった枠組みグローバル・ポリティクス，ポスト・モダン，マルクス主義

２）事実の断片と総合的解釈の枠組みの関係：相互に必要だが緊張もある

⑴事実の断片は「全体」の再構成には不十分（「すきま」が多数ある）
　→理論的枠組み（明示または暗黙）による埋め合わせ，解釈

⑵事実の発見や発掘と解釈の枠組みの関係は線形ではない

⑶解釈は，常に時期，地理，立場などによる制約がつきまとう

３．限界

１）「中国」を無定義のまま使う

⑴「中国」は歴史の一時期における概念装置の一つ（準普遍的と言えるか？）

⑵ →「国家」という概念の一つとして

２）アイデンティティ形成の過程で，史料や事実が<u>忘れられた</u>背景を軽視

３）人間の認識の限界，完結した物語への強い要求

４．その他の考慮：なぜ政治学と歴史学の手法を明示的に組み合わせたか